2008年7月7日 北海道新聞広告特集 掲載

PHOTO MESSAGE 2008

大地と海 どちらが欠けても 命は育たない

川面にうつ伏せになり、水中メガネごしに遡上（そじょう）するカラフトマスを見たことがある。流れに逆らい、上流に向かってただひたすら進もうとする姿が、震えるほど私の胸を打った。体を白くボロボロにすり減らしても、その目は生きる方向を見据えている。そうしたエネルギーの源は、いったいどこからくるのか。

海だ。冬、清流で誕生したカラフトマスの幼魚は春、大地の栄養をたっぷり含んだ雪解け水にのって海へと旅立つ。その後、2～3年を回遊し、成熟して川へ戻ってくるのだ。海を豊かにしてくれる大地の流れで子孫を残し、そのあと生涯を閉じていく。

ゆらゆらと尾びれをなびかせても平衡を保てない体。やがて迎える最期のとき。わたしは、命を燃焼し尽くしたその姿に畏敬（いけい）の念を感じながら、大地の栄養となり返ってゆく循環の「妙」に深い思いを巡らせた。

海と大地は連動している。大地に豊かな森があれば、海に栄養がたっぷり注がれ、そこに多様な命の存在が可能となる。その命はやがて大地へ戻り、森を育てる。海と大地は、互いを映し合う鏡なのだ。

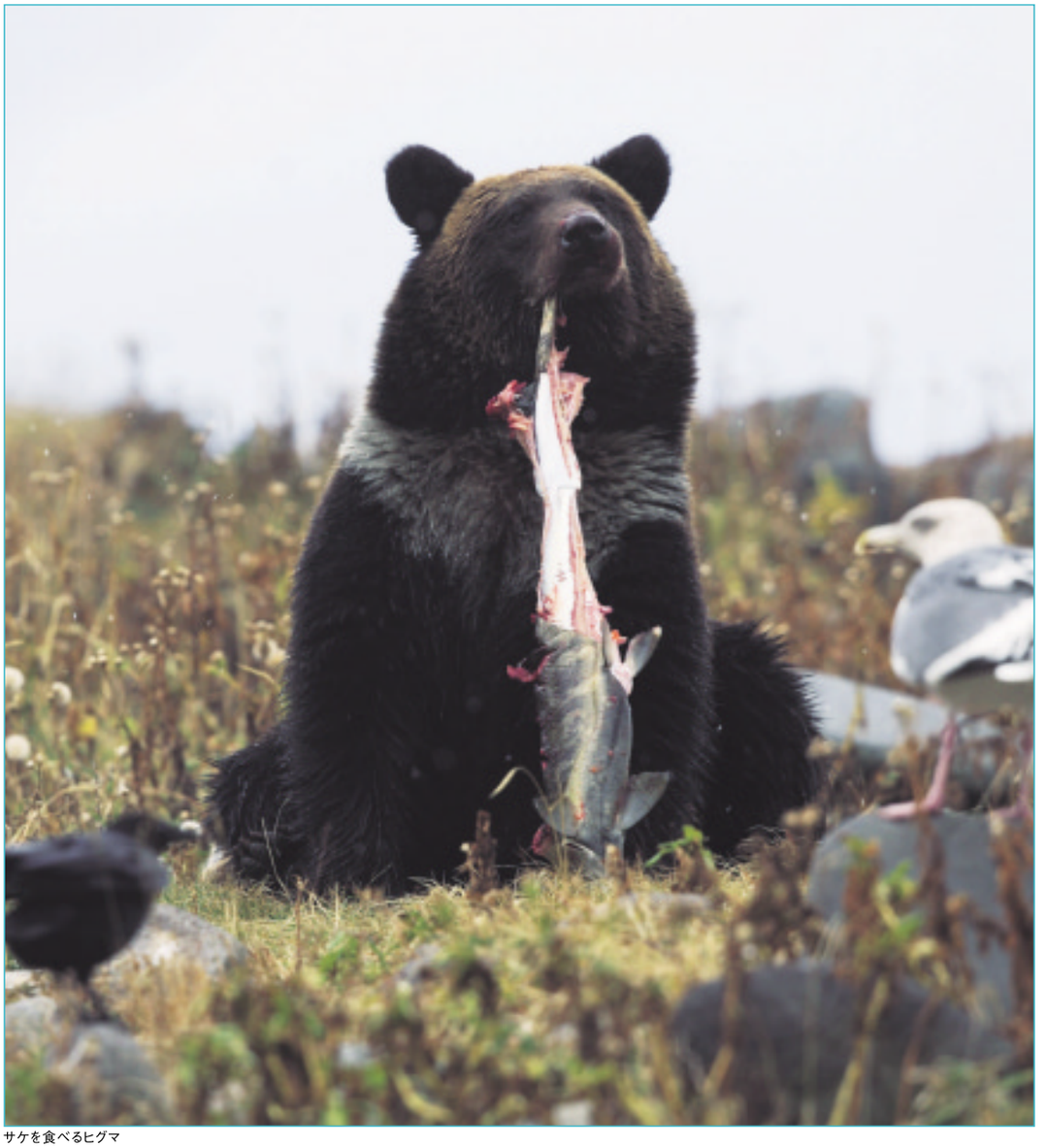
命の連鎖を守るために

幼少のころを過ごした田舎を、今でも鮮明に覚えている。天塩川の支流のさらに枝のような流れで、黒ずんだ大きなヤマベを何匹も釣り上げた。秋にはマスも手づかみできた。ふと思い立って訪ねてみると、その変ぼうぶりはすっかりわたしを落胆させた。立派な林道と消えた森。釣り糸を垂らすまでもなかった。

海と大地が響き合う北海道。ふたつを結ぶ動脈のような流れが、いま、北の大地にどれほどあるのだろう。ヒグマがサケやマスを追いかけられる河川が、知床以外にいくつ存在するのだろうか。

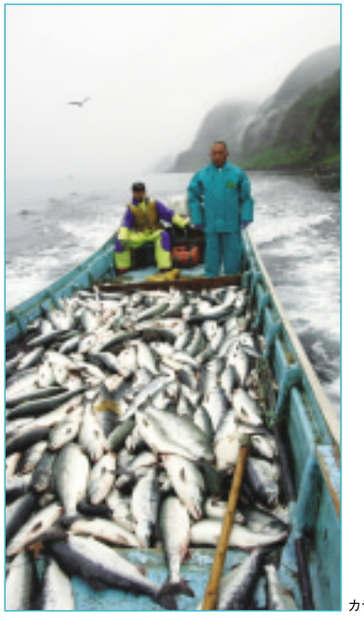
わたしたちは、いまある自然の素顔を守るのは当然として、失った命の連鎖や循環の回復のため、何が必要で何が不要かを選択する目を持たなければならない。

小魚をクチバシいっぱいに捕獲するウトウ



サケを食べるヒグマ

イカナゴという小魚に群がるウミネコなどのカモメ



カラフトマスは人間にとっても大切な水産資源

伐採された木